

小都市に学ぶ町並みまちづくり

東京大学都市工学科教授

西村幸夫

なぜちいさなまちなのか

冒頭からまったく個人的な話題で気が引けるが、今年二月刊行した拙著『町並みまちづくり』（古今書院）のなかで、私は一七のまちのまちづくりを紹介したが、それらはほとんどが人口一〇万以下の地方小都市だった。人口規模順に、北海道函館市・栃木県足利市・北海道小樽市・山口県岩国市・京都府舞鶴市・滋賀県近江八幡市・長野県須坂市・大分県臼杵市・島根県大田市・新潟県上市市・岡山県高梁市・岐阜県古川町・沖縄県嘉手納町・佐賀県有田町・愛知県足助町・福井県上中町・新潟県津川町の一七市町（残念ながらここでは村はなかった）である。このうち臼杵市以下は人口四万を下回っており、町として最大の古川町でも人口一万六千人である。

そこで、ちいさなまちのまちづくりこそ大きな可能性を秘めているということ、負け惜しみではなく、本気で訴えたのである。まえばきにかえてこう主張した。

「……小規模なまちでは自然や歴史に多くの手がかりをストリートに読み込むことができるうえ、合意形成にかかる手間も大都市とは比較にならないほど少なくてすむ。ひととひとのつながりもより強固である。魅力的なビジョンと強力なリーダーシップがあれば、現状を変えていくエネルギーを生み出すことは可能だろう。なによりスペー

スが豊かで、土地が高価すぎないのがいい。もちろんアイデアが煮詰まってしまったり、人材が限られていたり、さまざまな過去のいきさつや周囲のしがらみが新しい動きを封じてしまっている場合も少なくないだろう。大都市でなければ享受できないサービスもあり、その魅力と競い合うことに不安を感じることもあるだろう。

しかし本書で紹介している各地の町並みまちづくりは、まちの資源をユニークな目で発見し、プラス思考で評価し、制約がある場合もこれを逆手にとる発想で見事に成果を上げていく。重要なのは、現状に不満をぶつけることを卒業して、これからどうしていくのかを誠実に描いていくことでもある。それによって都市の魅力は輝きはじめ、ひとも職場も集まってくるようになるのではないだろうか。

たとえば地域コミュニティのつながりをプラライバシーのない窮屈な桎梏ととらえるか、防災や福祉に役立つネットワークととらえるかで、地域の評価は一変する。もちろん実際には両面があるのだが、どちらの側からものを見るかはそのひとの生き方の反映でもある。」

引用が長くなってしまったが、これで趣旨はおわかりいただけただろう。なにも町村に限っているわけではないが、ちいさなまちのまちづくりには大都市にないおおいなる可能性があるのだ。自明な点も多いが、行政組織に関連する側面に限ってちいさなまちの有利な点（もちろん本気で活か

す気があればの話であるが）をもう一度列挙すると次のようになる。

- 順不同で、①行政トップのリーダーシップが発揮しやすいこと、②小回りが利く組織であること、③地域と密接なつながりがあること、したがって④地域のニーズが把握しやすいこと、⑤情報の伝達が速いこと、さらに⑥行政課題が拡散していないこと、⑦地価問題に悩まされることが少ないこと、⑧自然環境が豊かであること、⑨全般に建築スペースが大きいこと、⑩まちづくりの手がかりとなる歴史や文化、民俗、伝承などが比較的良く残されていること、などである。

一点突破全面展開型まちづくり

広域行政の必要性が叫ばれ、政策的な予算が限られ、役場での専門職員の人材不足が深刻である現状では、すなわち小規模自治体賛歌を唱えてばかりではいられないという事情もよくわかる。

しかし小都市ならではのまちづくり戦略というものも確かに存在するのである。たとえば、それは一点突破全面展開型とも名付けることができるまちづくり戦略であり、またグッドアイデア型とも称するまちづくりである。さらにより先進的実験的な試みもあるだろう。

一点突破全面展開型のまちづくりとは、へたにバランスのとれた悪平等的な行政施策にとらわれることなく、「うちのまちのセールスポイントは

これ」と決めた一点に賭けて、一途にまちづくりに邁進するというタイプである。ただしおもしろいもので、一見すると単なる一点豪華主義のように思われがちだが、ひとつのことにこだわることによりグッと世界が開けてくるので、結果的にはより広いまちづくりへと自然に導かれてくるのである。

一点突破全面展開型まちづくりの典型的な例として岩手県九戸郡大野村が挙げられる。

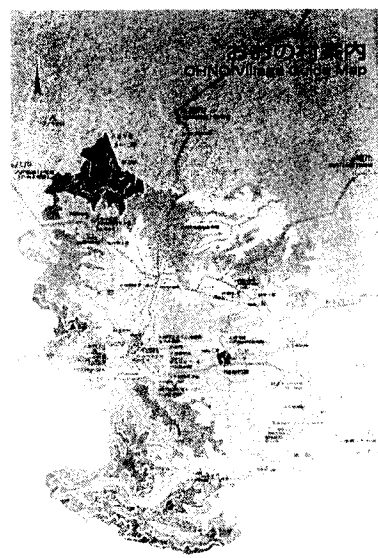
大野村は三陸地方、久慈市の北に隣接する山間の寒村で、冷涼な気候と痩せた土地のため農地は米作に適さず、酪農を中心とした人口七千人ほどの村である。土地の生産性が低いため、毎年千人以上の人が出稼ぎに出るとい村であった。

この村で出稼ぎ解消のために「裏作工芸」と称して工芸の里づくりがスタートしたのは一九七八年のことだった。東北工業大学の秋岡芳夫教授グループが全面的にバックアップして一人一芸の村づくりが動き出した。木工の指導を中心に、各種工芸が次第に村に根付いていった。一九八二年には村の中学校の給食用食器として木の器が全面的に採用された。これは後、小学校、保育所にも広がっていった。また、一九八四年には村の工芸グループが日本民芸協会賞を受賞している。

これらの活動を支える基地としての建物の整備も次第に進められ、産業デザインセンターが一九九一年に完成、隣接して陶芸やガラス、裂き織りの各工房が一九九五年に竣工している。さらにこ

の一带には道の駅、温泉が建設され、宿泊施設グリーンヒルおおのも一九九五年にオープンしている。いずれも全国レベルのデザインと内容を誇っており、これらの施設が建設された地区をいまだ「おおのキャンパス」と総称している。ここまでの総事業費は二四・五億円、農水省や国土庁、林野庁、県など多くの補助金をうまく利用している。

出稼ぎ対策の裏作工芸が地域ぐるみのデザイン運動にまでひろがってきたのである。それだけで



センスが光る「おおの村案内」の看板デザイン

はない。キャンパス内に併設されたパークゴルフ場は村民は無料で利用でき、朝から夕暮れまで利用者が絶えないという。温泉「健康の湯」は村外から車でやって来るお客でいつも賑わっている。一九九三年に四万人だった来訪者は一九九六年度には一三万人にまで増えているのだ。

建物だけでなく案内図ひとつとっても実に洗練されており、ひとりよがりではない、全国レベルを視野においたまちづくりが進められていることがわかる。秋岡芳夫教授のようなブレンと巡り会えたことが大きい、そうした機会を逃さず、血肉としていった村民、村職員の熱意と意気込みも相当なものだったのだろう。

工芸という一点を突破することによっておおのキャンパスに至るまちづくりの構想を現実のものとする事ができたのである。まさしく一点突破全面展開型のまちづくりである。

グッドアイディア型まちづくり

グッドアイディア型などと命名するとお手軽すぎるような気もするが、これだけ情報化が進んでくると、新しい情報手段をうまく利用してこれまではまったく発想の異なる事業やまちづくりを行うことが可能になりつつあるといえる。

本特集で紹介されている電子メールを利用した医療、福祉、保険の連携を進める岩手県川井村や全戸フックス網を敷く長野県朝日村の例などま

もうひとつ、小都市のまちづくりの特権として、先進的な実験がやりやすいということが挙げられる。

その好例が神奈川県足柄下郡真鶴町である。

真鶴町の「まちづくり条例」、一般に美の条例ともいわれる革新的な条例が一九九三年に制定されたことはすでによく知られている。マンション建設問題、水道水給水問題から端を発したまちづくり運動がついに詳細な条例にまで至る過程は『美の条例—いきづく町をつくる』（五十嵐敬喜ほか著、学芸出版社）に詳しいので、ここでは深入りはしない。

一連の施策の先進性を要約すると、①「条例」と「土地利用規制規程」「美の規程」の三点セットでことにあたる仕組み、②土地利用規制規程として成文化された町独自のゾーニングとその詳細な内容、③一般に個人的なものとなる「美」に原則、規程を設けたこと、④条例実施の手続きを

さに、「グッドアイディア！」と快哉を挙げたくなるような試みがこれから先、ますます増えてくるものと思われる。

これは自治体の例ではないけれど、こんなおもしろい例もある。

現在、在庫二五〇万冊に達する世界最大（と自ら称している）の書店はインターネット上に商店を張るアマゾンという書店であるが、これは実際の売場を持たないヴァーチャルな本屋なのである。つまり、顧客からの注文を電子メールで受け、支払いも電子マネー。これを直接倉庫から、あるいは出版社へ注文して届けるのである。一番速いサービスだと、注文してから一週間ぐらいで手元に洋書が届くことになる。これは現在の日本の取次店制度よりもはるかに効率的である。和書でさえ、注文して数週間かかることは日常茶飯事なのに、アメリカから一週間で洋書が配達されてくるのだ。その上ドルの交換レートは実勢で、さらに本によっては割引きもある。キーワードや書名（部分でも可）による本の検索などもネット上であっという間にできる。

二五〇万冊もの洋書のライブラリーは日本には存在しないので、このヴァーチャル書店の検索は国会図書館をも凌駕する図書情報を卓上のパソコンのなかに収めたようなものだ。そしてこの本屋にはどこからでも瞬時にアクセスできる。地方中小都市に長らくつきまわってきた距離のハンディが一瞬にして克服されてしまった。同時にコ

民主化、透明化し、その中に議会を位置づけたこと、などが挙げられる。こうした先進的な試みを人口一万人ほどの小さな町が実施したのである。

その背後には弁護士の五十嵐敬喜氏（現法政大教授）をはじめとする専門家チームの献身的な後押しがあったことは確かだが、小都市だからこそ、論理を突き詰めた規制策を様々な方面での障害を乗り越えていけたという側面がある。

たとえば、真鶴町では美の規程に従ってすべての建築行為をチェックする態勢をとっている。通常は一定規模以上の建築面積の開発だけを対象とすることが多いが、真鶴では下限を設けず、すべての建築行為を審査しているのである。さらに自己居住用以外で一定規模以上のものについては行政担当者が建設工事が行われる現場を事前に調査し、美の規程に従ったリクエストを事業者に対して行うことになっている。これなど、小都市ならではのきめの細かい手続きだといえる。

ストのハンディも、また当然ながら情報のハンディもなくなくなってしまったのである。

このように現代は店構えも売り子もいない書店が最大の売り上げを誇るという時代なのである。むしろ始めから売場や大勢の従業員という「重荷」を持たなかったからこそ、フットワーク良く、少人数でグッドアイディアを実行に移せたのである。大ヒットのアイディアの背景には情報技術の急速な発展とインターネットの爆発的な普及がある。つまり情報化が急激に進行している現在、まさに通常では考えられないようなビジネスチャンスがころがっている時代なのだ。

こうした事情は自治体でも変わらない。情報化の大変化の中にビジネスチャンスがころがっているように、まちづくり大躍進のチャンスも見いだせるはずである。そしてその時に、何より大切なのは機敏に物事を判断し、進行させる能力である（将来を見据える眼力が前提ではあるが、これには地域差はない。個人差があるだけだ）。いかに重荷が少ないか、あったとしても少なくできるかが勝負である。この点では身の軽い小都市の方が一歩先んじる可能性はるかに高いといえる。そして先述したように、これまで地方都市のネットワークであった距離の制約もコストの制約も、時間の制約もインターネットは解消してくれたのである。

先進実験型まちづくり

首長が明快な意志を持ち、行政スタッフが丸となってその実現にあたるのであれば、明らかに小さな自治体の方がまとまりやすい。あといかに高邁な実験精神を有するか否かの問題である。そしてこれは個人の資質の問題で、組織の大小にはかわらないだろう。

まちづくりの実験室

このように小都市は、ひとことという、いい意味でまちづくりの実験室になり得るのである。これは試行錯誤を繰り返すというのとは違う。突破できる一点をいかに見つけるか、大躍進のアイディアをいかに生み出すか、そして他のどの都市もが思いもいたさなかったような事項に光を当て、いかに新たな方法論を構築するか、こうした問いかけに対して好意的な模索を許容する土壌として小都市は重要なのである。